

## 資料展示

### <『コルカタ』/小池昌代著・萩原朔太郎初版本等>

昨年 9 月に本学の小池昌代特任教授が、詩集『コルカタ』で第 18 回「萩原朔太郎賞」を受賞されました。今回の展示では、小池先生の詩とともに、本学所蔵の萩原朔太郎初版本（複製）などを紹介いたします。小池先生にはこのほか、詩集『もっとも官能的な部屋』（第 30 回高見順賞）、小説「タタド」（第 33 回川端康成文学賞）など多くの作品があり、エッセイや絵本の翻訳といった分野でも活躍されています。

萩原朔太郎(1886.11.1-1942.5.11)は、教科書にも登場する大正・昭和期の著名な群馬県前橋出身の詩人です。代表作に『月に吠える』『青猫』『氷島』などがあり、口語自由詩（五・七・五のような定型を持たない詩）を確立させたと言われ、現代詩に多大な影響を与えました。

萩原朔太郎は評論も数多く残しましたが、ミステリーファンとしても知られ、1926年のエッセイ「探偵小説に就いて」で江戸川乱歩を賞賛、1931年からは直接親交も結びました。本学の乱歩邸を訪れたこともあり、乱歩コレクションには朔太郎から贈られた初版本も含まれています。

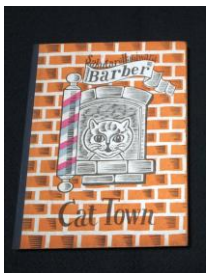
立教大学図書館

#### <展示資料>

1. 『コルカタ』小池昌代著 思潮社 2010
2. 『タタド』小池昌代著 2007
3. 『小池昌代詩集』（現代詩文庫）思潮社 2003
4. 『絶望の逃走』萩原朔太郎著 第一書房 1935（江戸川乱歩コレクションより）
5. 詩集『月に吠える』萩原朔太郎著 感情詩社・白日社共刊 1917  
（復刻版：近代文学館「名著復刻全集」 1969）
6. 『青猫：定本』萩原朔太郎著 版畫莊 1936
7. 『氷島：詩稿』冬至書房 1963（近代文藝復刻叢刊）
8. 『父・萩原朔太郎』萩原葉子著 1959
9. 『萩原朔太郎 撮影写真集』上毛新聞社 1981
10. 『新潮日本文学アルバム：萩原朔太郎』新潮社 1989



## 詩に出会う



あらゆる詩は、一人一人に、それぞれ異なった、出会いの瞬間を用意している。

萩原朔太郎といえど、多くの人が名前くらいは知っている。教科書に載っていれば、作品のいくつかわかってもいるだろう。朔太郎は、ニッポンの偉大な近代詩人というのが、現代のわたしたちの「常識」になった。けれどこれだけではつまらない。これだけでは、朔太郎の詩が窒息してしまふ。わたしが願うのは、冒頭にも書いたように、一人、一人、異なるやりかたで、朔太郎の詩に、ほんとうに「出会う」こと。

自分のことを少し話そう。こつそり言うが、わたしは四十を超えるまで、朔太郎を面白いと思つたことがない。それは不気味で生理的な世界。でろでろ、くちやくちや、べちやべちやしたものであると、簡単に言えば思つていた。

詩を読むということは「秘密」に近い。とてもプライベートな行為である。名前があり、よく知られているというだけでは、その作品と繋がれない。詩はもつと、読む人間の「核」の部分と、常識の外で、論理を超えて繋がるものだ。だからこそ、思いがけない時と場所に、一篇の詩が開けてくることもある。わたしの朔太郎体験もそうだった。

一人でいるとき、人間が、一人の自分しか見せないもの。ぶるぶる震えている弱い心、不安な心の揺れがそこにあった。感性の毛穴を全開にし、「詩」を捕らえるために、帆のように張り詰めた精神がそこにあった。

へーっ、かつこいい朔太郎さん。

黙読はもとより、一人でも、人前でも、わたしは朔太郎の詩を声に出して読んでみた。ときにはそれに勝手にメロディーをつけて、歌ってみるようなこともした。自分の身体に詩の言葉を入れ、それを吐く。吐く、吐く、吐く。そのとき、サクタローの名前は消え、言葉は読者その人のものとなる。

おわあ、こんばんは、おぎやあ、おぎやあ、おぎやあ(猫)、とをてくう、とをるもう、とおるもう(鶏)、ぎよ、ぎよ、ぎよ(蛙)、ぶむ、ぶむ、ぶむ(蠅)、てふ、てふ、てふ(蝶)、のをあある、とをあある、やわあ(犬)。詩のなかにあふれかえる、むんむんとする生きものたち。彼らの息、彼らの生。

こうして文字を黙読するだけでも、頭蓋の内に音が響く。透明な音楽だから、だから作品も楽譜のように、書いてあるそのとおりを読めばいい。「てふ」だって、「ちよう」ではなく、「てふ」とそのまま。「恐ろしく憂鬱なる」という作品では、註にそう書いてあるのだから。「チョーチョーと読むべからず」と。「てふ」という音は、「蝶の翼の空気をうつ感覚を音韻に写したものである」と。この感覚に乗れる人なら、朔太郎との出会いが、すぐそこにある。

近代の詩には、わたしたちが、どこかに捨ててきた「歌」がある。日本の伝統である「俳句」や「和歌」・「短歌」、はたまた「歌詞」や「童謡」でなく、どこまでも「詩」。「詩」として、日本語がどこまで立てるのか。その厳しい命題を、朔太郎の詩は、がっしりと引き受けた。

「光る地面に竹が生え、……」と始まる、一連のホラー詩も捨てがたいが、「天景」というたった七行の詩を、どこかでぜひ、読んでみてほしい。四輪馬車が運ぶのは、亡くなった誰かの魂だろうか。巨大地震から一週間。詩は現実から切り離された、単に美しいユートピアではない。そのことも、朔太郎の詩は証明してくれるだろう。

萩原朔太郎詩集  
『月に吠える』より

竹

ますますなるもの地面に生え、  
するとき青きもの地面に生え、  
凍れる冬をつらぬきて、  
そのみどり葉光る朝の空席に、  
なみだたれ、  
なみだをたれ、  
いまはや懺悔をはれる肩の上より、  
けぶれる竹の根はひろがり、  
するとき青きもの地面に生え、

竹

光る地面に竹が生え、  
青竹が生え、  
地下には竹の根が生え、  
根がしだいにほそらみ、  
根の先より繊毛が生え、  
かすかにふるえ。

かたき地面に竹が生え、  
地上にすどく竹が生え、  
まつしぐらに竹が生え、  
凍れる節節りんりと、  
青空のもとに竹が生え、  
竹、竹、竹が生え。

天景

しづかにきしれ四輪馬車、  
ほのかに海はあかるみて、  
麦は遠きにながれたり。  
しづかにきしれ四輪馬車。  
光る魚鳥の天景を、  
また窓青き建築を、  
しづかにきしれ四輪馬車。

蛙の死

蛙が殺された、  
子供がまるくなつて手をあげた、  
みんないつしよに、  
かわゆらしい、  
血だらけの手をあげた、  
月が出た、  
丘の上に人が立つてゐる。  
帽子の下に顔がある。

幼年思慕篇



# 詩集『コルカタ』より

## 最後の詩

自分の生まれた五月に逝きたいと

ある詩人は言つて そのとおりになつた

わたしは七月生まれ

でも

五月に逝きたいひとの気持は すぐよく わかる

いやそれが

いま 正確に わかつた気がする

この おおらかな縁に囲まれながら

地球での日々を別れを上げる

嫌なことは 山ほどあつた

でもそのときは きつと忘れてるだろう

さようなら

その一瞬が ありありと わかるような気がして

わたしはぎくつとした 自分のことなのに

桜の季節が終わる 花が緑に変わる

風に ざわめく木の音が聞こえる

詩を書くうちに

もともと友達が少なかったわたしは

友をますます失つた

いや そのひとを まだ知らないだけで

じつは新しい友達が増えた

のではないかと考えることもできるが

やはりそれは あまりにずばんな楽観である

わたしは確かに 独りになつたのだ

いつも窓際に机を置いて

樹木を見ながら

こうして詩を書いてきた

それが わたしの いつのまにかの 習慣

いい歳をして センチメンタルな女だつて鼻で笑つてもいいよ

もう 何を言われても 簡単には傷つかない(ほんとうだろうか?)

お酒も飲みにかかず

趣味も持たず

詩を書いたり 歌を歌つたり

結婚したり 別れたり 子供を産んだり

便器を掃除したりして(大事なことだ)

人生を過ごしてきた

そして最後は こうして

木が

目のなかに残るのではないか

そのように

そのように わたしを確信させるほど確かに

木が立っている

いま わたしの目の前に

# 詩集 『夜明け前十分』 から

## 本と鳥

ベネチアの

秋の午後

古本屋のなかへ

一羽の白い鳥が迷い込んできた

くらい天井を

まだ続きの青空と信じる勢いで

でも 不意に囚われに気付いたのだろうか

翼を折り

宙に静止した一瞬があった

この町では鳥が

本になつたり

本が鳥に

なることがよくある

誰もが目を伏せて本を読む店内で

そのときあちこちの背表紙のかどが尖り

飛ぶ音にきき耳がたつたのがわかった

翼は頁によく似ている

はばたきながら

ねむる思念をゆりおこすのだ

すばやく初めの頁に戻つたり

まだ読んでいない

終わりの頁までいつきにとんでみたり

あれは鳥でなく

飛ぶ本だった

平積みの本のうえに

ながれた影の固さを見れば。

ドアを開けると

鳥はわたしの肩をかすめて

きゅいつと 街のなかへ飛び出していったが

あの日あの店のあらゆる書物には

翼の音が 霧のようにしみこんだ

次に誰かがドアを開くときは

鳥になろうと

どの本も静かにこころを決めただろう